

★ ★ ★ 魔女の世界 ★ ★ ★

夏の冒険



夏の終わりに 虫が鳴く夕方、
魔法のトーラは 家の本棚の前に 積みあがった本を
片づけている 真っ最中でした。

どの本も 手にとったら 読んでしまいたくなるため、
片づけは 昨日から 一向に進んでいません。
トーラは やっと読み終えた本を パタンと閉じました。
「今度こそ ちゃんと片づけなくては!」

ところが、そう声に出した途端^{とたん} 一冊の古い本に
目が止まりました。

小さな宝石が 埋め込まれた表紙には
手書きのサインで A と書いてあります。

その時、トーラは 思い出しました。

その本は ずっと昔、祖母から もらったもの だったのです。
でも その頃トーラは 使えるようになったばかりの 魔法に
夢中で、この本なんて まったく 開きも しなかったのです。

「これを 気に、読んでみるのもいいわね」

そうつぶやいた トーラは 大きな本を 手に取り、
ゆっくりと 表紙を 開きました。

一週間がたっても、トーラは まだ あの本のことを考えていました。
そこには 時の流れさえも 超えることが 出来るという
大魔法の使い方や、それを書いた魔法が
訪れた国のことなどが 書かれていました。

いつか そんな魔法を 使えるようになりたいと 夢見ながらも、

トーラが惹^ひかれたのは 氷の国の話。

細かく描かれた絵や 地図の中に、壮大な真っ白の世界が
いきいきと 描かれていたのが 忘れられないのです。

そしてその国の とある洞窟の中には 大きな竜が 住んでいると
書いてありました。

その本は そのことを最後に、途切れるように 終わっていました。

「ここに描いてある絵は 本当に 本当のものなのかしら。

もしそうなら、そこには どんな動物たちの物語があって、
どんな景色が 広がっているの？

ああ、その竜を 一目でいいから 見てみたい！」

そう思った トーラは 口に出していました。

「そうよ、私は一度見てみたいんだわ。

そこへ行って、その場所を 自分の目で見て 確かめたい。

でも それはどれだけ先に になってしまうのかしら」

今までだって、トーラが 行きたい場所は 沢山ありました。

でも そんな余裕がなかったり、やりたいことが たくさんあったり
したため、随分長いこと この町から 出ていません。

そして その時 憧れていたものは、いつの間にか どうでも
よくなって 忘れてしまうのでした。

でも、忙しい夏が 終わった今は 時間がたっぷりとあります。

「今、行くべきだと思うのよ。私は」

立ち上がったトーラのやることは もう決まっていました。

今すぐ 冒険の準備と 計画を 立て始めるのです。

それから 何週間もかけて、トーラは 地図を片手に
大きなリュックを 背負って歩きました。

瞬間移動の魔法などを 使えるのは

本当に 優れた魔女のみ なのです。

森の中や 大きな草原を進むのは どんなに不便なことがあっても
心がワクワクと踊るものでした。

途中、道を間違え 立ち寄ったいくつもの町で、トーラは たびたび
誰かの病気を 治したりもしました。

そして 最後は 馬の背中に 乗せてもらい、
いくつもの山を超え たどり着いた 草が生い茂る海岸で、
トーラは 出会った鹿に聞きました。

「この海の向こうに 氷の国があるっていう話を、
あんたは 知っている？」

ところが、鹿は言いました。

「わたしは この土地以外のこと、ましてや 海の向こうのことなど
興味もないから 知らないね」

トーラは もう一度 地図を確認しましたが、地図に描かれている
景色と ここは まったく同じでした。

決心したトーラは 魔法で小さな船を作ると、夜明けと共に
深い 青の海へと こぎ出しました。

海岸は だんだん後ろへと 見えなくなり、辺りは 一面の海と空
だけに なりました。

目の前では 沈みゆく ^{まぶ}眩しい太陽が、水平線の 向こうの空を
赤く染めています。

その時、船がぐらりと 揺れました。

トーラが 振り返ると、大きな波が 近づいてきています。

船から 身を乗り出すと、その下には 何十メートルもある
巨大な クジラが 泳いでいました。

その時、突然 耳が割れるかと思うほど大きな音をたて、海面が 空へと 吹きあがりました。

それと共に、あの巨大なクジラが 海から 飛び上がり、空中で 舞い踊るように 回転しました。

辺りには 竜巻のような 波が押し寄せ、水しぶきが 降り注ぎます。トーラの乗った船は 右へ左へと 傾きます。

それでも、トーラは 心を奪われたように 空に浮かんだクジラを見上げていました。

それは ほんの一瞬のことでしたが、クジラが 再び 大波をたてて 海の底へと 潜るまでは一時間もたったかのように感じられました。

やっと 水平線の向こうに 白い海岸の 片端が見えたのは、辺りが すっかり 暗くなったころでした。

トーラは 後ろを振り返りましたが そこには 遥か 遠くまで続く 海が 揺れているだけです。

波が トーラの方へ 押し寄せてきて、力強く 船を押します。

「戻りなんかしないわ。

ほら、海岸が見える。あの国は もうすぐ そこなのよ!」

そして 船が着くなり、トーラは 一目散に 走り出していました。

そこは 本に 描かれていたとおり、暗闇の中に 氷と雪で出来た 大地と 夜空の間に 氷山がたつのみの 世界だったのです。

「この地面も、あの地面も、あの山も 全部 氷でできている。それ以外は、なんにもないんだわ!」

そう叫んだ トーラの声さえも 吸い込む静けさの向こうで、波の音だけが 響いていました。

それから 次の日、また その次の日と トーラは馬と一緒に この国を 歩き続けました。

魔法を使えば それほど寒くありませんでしたし、食べ物だってリュックから いくらでも出てきました。

辺りには 丘のように 盛り上がった 小さな雪山や 斜面が 沢山あります。

その中でも ひときわ 高い場所は、地平線まで 白く光る景色を見渡すことも出来ました。

それ以外は 何もない大地でも、トーラは 遥か昔、あの本を書いた魔女と 自分が 同じ場所にいると 思うだけで まるで 夢を見ているかのような 気持ちになりました。

ある夜、トーラは テントを張った横で たき火を起こし、もう一度 切り取った あの本のページを 呼んでいました。

竜がいると 書いてあるのです。

呪文を唱えないと 入れない どこかの洞窟の中に、 竜はいるのです。

それは きっと 大昔から 生き残っている 最後の竜で、 誰にも 知られずに そこで 暮らしているのです。

その時、どこからか 水の音が聞こえ、トーラは辺りを見回しました。 少し離れた地面に あいていた穴の横で生き物が動いていました。 それは やがてゴロゴロと 転がったあと、動かなくなりました。

初めて見る生き物に 注意深く近寄ったトーラは、 そっと話しかけました。

「あのー…こんばんは」

振り返った その動物を見て、トーラは いつか本で読んだことを 思い出しました。

そうだ、この動物は アザラシといったかしら。

アザラシは しばらく トーラを 見つめたあと 言いました。

「昼寝をしていたんだけど」

「でも もう夜だわ」

そう トーラが答えると、アザラシは 起き上がって 言いました。

「君は 魔女だろう？」

「どうしてわかるの」

「とんがり帽子に 火が出せる杖なんてものを 持っている人は、
君の他に 知らないからね」

「正解。私は魔女だわ。

遠い国からここまで きたの」

「何をしに 来たんだい」

少し考えたあと、トーラは 答えました。

「そうね、ちょっとした冒険よ。

氷だけの国とやらを、一目 見てみたくてね」

「いいねえ」

アザラシは そう言うと 再び 目を 閉じました。トーラがテントへ
戻ろうと 立ち上がります。すると、アザラシが 言いました。

「さっき、僕は 君のような人は 見たことがないっていったらろう？」

「ええ」

「実は 君の他に もう一人だけ、とんがり帽子と 長い杖を持った
人を知っている。

彼女は 魔女で、この国に住んでいたんだよ。

もう、後姿しか 覚えていないくらい ずっと ずっと 昔の話さ」

驚いたトーラは 聞き返しました。

「それは……本当に?!」

本当だよ、とアザラシは 言いました。

「あのね、私は ある洞窟を 探しているの。こんな形をした氷山の中にある。あんたが 話していた魔女が 訪れた所だと思わ」
そう トーラは言う、魔法を使い 氷の上に 絵を 書きました。
アザラシは 言います。

「わからないな、僕は 陸のことについてはあまり詳しくないからね。
ただ シロクマには 気を付けた方がいい。

やつらに あったら おしまいさ」

そして ふと 思い立ったように 氷にあいた穴の中へと
飛び込むと、言いました。

「君、魚を食べるか」

「えっ、こんなところに 魚がいるの？」

「なに、氷の下なら いくらでもいるさ」

それきり、アザラシは 穴の中へと 見えなくなりました。

「なるほど、この下は 海なのね」、とトーラは つぶやきました。

トーラは あのアザラシが 捕ってきてくれた魚に 魔法をかけると
リュックの中に入れ、洞窟を探しに出発しました。

馬に乗って 何もない 真っ白な大地を 走ります。

時々、白いキツネや 大きなくちばしを 持った鳥の集団などを見かけることが ありましたが、アザラシのように 話をしてくれたものはいませんでした。

それでも、だんだんと 空に 黒い雲が かかりはじめていても
氷の国は とても 美しく、トーラは すっかりその景色に
魅了されて していました。

そうして ある夜、トーラが たき火をしていると
後ろから 雪を 踏みしめる足音が しました。

一瞬 あのアザラシかと 思いましたが、それにしても 足音は重く、
トーラは 恐る恐る 振り返りました。

ランプに照らせば、遠くから、白く大きな獣が
こちらに のしのしと 迫ってきているのが 見えました。

(ただ シロクマには 気を付けた方がいい。

やつらに あったらおしまいさ…)

そんな アザラシの言葉が蘇り、

トーラは 背筋が すうっと 寒くなるのを 感じました。

魔法の杖は テントの中にあります。急いで とりに 戻らないと!

ゆっくりと 後ずさりをする間にも、

クマは こちらへと 近づいてきています。

その牙は 確かに尖っていて、鋭い爪は とても恐ろしく見えました。

ついに 立ち上がり テントの中へと トーラは逃げ込みました。

馬には 申し訳ないですが、ぴしゃりと カーテンを 閉めます。

ところが、しばらく 時がたっても 何もおこる様子が ありません。

トーラが そっと隙間^{すきま}から 覗^{のぞ}くと、シロクマは たき火の横で
焼いていた魚を 全て 引き抜いている最中でした。

そして 一瞬 トーラを見て 目を細めると、魚を加え、

くるりと きびすを返すと どこかへと 去ってゆきました。

大きく 息をついた トーラは テントから出ると、小さく笑いました。

「魔女はおいしくないわよ」

次の日、トーラが 歩いていると

ついに 目の前には あの氷山が 見えました。

思わず、足が そこへと走り出していました。

大きな 大きな 氷山のふもとには、石で出来た扉があり、

何かの文字が描かれています。

「この中に 地球最後の竜が いるのね」

トーラは 威勢よく 扉を開く 呪文を唱えます。

ひゅうっと 風が 巻き起こり、扉を押しました。

すると、扉が ガチャリと 音を立てると、ゆっくりと 開いたのです。

中は暗く、よく見えません。

トーラは 緊張しながらも 一歩 踏み出しました。

氷で出来た 地面は固く、今にも 滑りそうです。

あまりにも 中が暗いため、トーラは 杖に 灯りを ともしました。

すると、遙か上の天井から 青く輝くつららが 沢山つるさがり、

まるで 水晶のような 氷で囲まれた 広い洞窟の中に、

何かを くわえた竜が 立っているのが 見えました。

息をのんだトーラは 杖の灯りを消すと、暗闇に 目をこらします。

ところが、竜が動く気配は 全くありません。

再び 杖に灯った光とともに、おそるおそる近づくと、

そこにあったのは 大きな竜の置物でした。

本物ではないと 知っても、

トーラは 置物を 長いこと 見つめていました。

すると、その尖った牙を持つ口が 本をくわえていることに

気がつきました。

それは ^{はる}遙か大昔からそこにあったのかと思うほど、古い本でした。

「何だろう」

とそこまで言って、トーラは 目を見開きます。

表紙には ^{ていねい}丁寧に大きくアルファベットの A と

掘られていました。

トーラが 祖母から もらった本と 全く同じ形でした。
トーラは 帽子を深くかぶりなおすと、その本を 両手で抱えました。
それは ずしりと重く、まだ しっかりと 形を保っています。
本の中身は 古い魔女の言葉で 書かれていて、
トーラには よく読めませんでした。
ただ、表紙を開いた1ページ目には、簡単な言葉づかいで
大きく書かれてあったのです。

「竜も 私も、もういない。この本は 見つけた者に 授ける」…と。

それから 何日もが立って、トーラが 氷の国の入口あたりに
帰ってくると、そこには また あのアザラシが 寝そべっていました。
「やあ。まだ ここに いたとはね」
と彼は 言いました。

「ええ、それより この本を見て。洞窟で 見つけたの」

そう言って、トーラはアザラシに一部始終いちぶしじゅうの話をして聞かせました。
アザラシは それを聞いて ちょっと 悲しそうに 笑うと言いました。
「この地にあまりに長くいる旅人はね、病気になって しまうのさ」
「病気？ なら私、治せるけれど」

「いや、君にも治せないと思うよ。みんな突拍子とっぴょうしもないことを
いきなり言いだしてね、それきり どこかへと 消えてしまう。
君がいう あの魔女も そうだったよ」
「え？」

「あの星の 美しさに すっかり 飲み込まれて、
突然 あの星へ飛んでいく と言いだしたんだ。

ある日、恐ろしい生き物を連れて あの一番高い山へと

登っていったよ。それきり、彼女の姿を 見たものはいないのさ」

「どうして そんなことを 知っているの。

ううん、最初に 教えてくれたら よかったのに」

アザラシは 楽しそうに 笑います。

「まあ その本を 見つけられたんだから いいじゃないか」

この厚い氷は、何か魔法を隠^{かく}している。

トーラは そんなことを 思いながら 立ち上がりました。

「ありがとう。私は、もう帰るわ。この本を持って」

アザラシは 手を振ると言いました。

「うん、さようなら」

そして、トーラは 再び馬に乗ると、

自分の家へ向けて 出発しました。

さあ、本には 何が書いてあるのか、調べないと いけないことが
またひとつ 増えたのです。